

The Open
Mind of
**PATRICK
LAFCADIO
HEARN**
Coming Home
LAFCADIO HEARN
GATHERING
IN IRELAND
OCTOBER
2015

オープン・マインド・オブ・
パトリック・ラフカディオ・ハーン
——帰郷——
事業報告書



The Open
Mind of
**PATRICK
LAFCADIO
HEARN**
Coming Home
LAFCADIO HEARN
GATHERING
IN IRELAND
OCTOBER
2015



オープン・マインド・オブ・
パトリック・ラフカディオ・ハーン
—— 帰郷 ——

ラフカディオ・ハーン・ギャザリング・イン・アイルランド

2015年10月7日【水】—13日【火】

ダブリン | ウォーターフォード | トラモア | ゴールウェイ | コング

〔主催〕ダブリン・リトル・ミュージアム、山陰日本アイルランド協会、小泉八雲庭園、ダブリンシティ大学 ほか(事業別)

〔共催〕在アイルランド日本国大使館、松江市、ウォーターフォード市、Galway 2020 ほか

〔後援〕駐日アイルランド大使館 ほか

〔助成〕国際交流基金(企画展「帰郷——オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーン」、小泉八雲・朗読のタベ)

イベントスケジュール	3
企画展「帰郷——オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーン」	4
オープニング・セレモニー	6
レクチャーと音楽「ラフカディオ・アット・ホーム」	7
ポール・マレイによる「ラフカディオ・ハーンのダブリンの恐怖」	7
小泉八雲・朗読の夕べ「稀人——彼方より訪れしもの」	8
小泉八雲庭園フレンドシップ・イベント	12
ウオーターフォード市長主催歓迎レセプション	12
小泉八雲のレリーフ除幕式	13
トラモア歓迎イベント	14
米山麻美オルガン・リサイタル	15
ダブリンシティ大学レクチャー「ハーンと日本」と日本茶の体験	16
コング歓迎イベント	18
マイケル・D.ヒギンズ大統領との謁見	20
在アイルランド日本国大使主催レセプション	21
ラフカディオ・ハーンゆかりの地ツアー	22
山本恭司ライブ in ゴールウェイ	23
広告デザイン	24
掲載新聞記事	25

オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーン——帰郷 事業報告書

〔発行日〕 2016年3月25日

〔発行者〕 山陰日本アイルランド協会

〒690-0044 島根県松江市浜乃木7-24-2

島根県立大学短期大学部松江キャンパス 小泉研究室

電話/Fax: 0852-20-0207

〔編集〕 山陰日本アイルランド協会

〔写真協力〕 佐野史郎、田面徹、召古裕士、坪井れい子、川島典子、小泉八雲・朗読の夕べ ほか

〔デザイン〕 石川陽春

イベントスケジュール

Schedule of Event

月日	都市名	時間	会場	行程
10/7(水)	ダブリン	14:30	大統領公邸	マイケル・D.ヒギンズ大統領との謁見
		18:00	ダブリン・リトル・ミュージアム	企画展「帰郷——オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーン」オープニング・セレモニー
		20:00	在アイルランド日本国大使公邸	渥美千尋在アイルランド日本国大使主催レセプション
10/8(木)	ダブリン	14:00	ダブリンシティ大学	レクチャー「ハーンと日本」 日本茶のレクチャー & ワークショップ
		18:00	ダブリン・リトル・ミュージアム	レクチャーと音楽「ラフカディオ・アット・ホーム」
10/9(金)	ダブリン	9:30		ラフカディオ・ハーンゆかりの地ツアー
		13:30	セント・アンズ・チャーチ	小泉八雲・朗読の夕べ「稀人——彼方より訪れしもの」
		19:00	ウォーターフォード・シティ・ホール	ウォーターフォード市長主催歓迎レセプション
10/10(土)	トラモア	11:00	小泉八雲庭園	小泉八雲レリーフ除幕式
		15:00	トラモア・コーストガード・カルチャー・センター	小展覧会「ラフカディオ・ハーン——トラモアから松江へ」 スピーチ「ヒストリカル・センターの設立、役割そして将来性」 日本茶のレクチャー & ワークショップ
10/11(日)	トラモア	11:15	ホーリー・クロス・チャーチ	米山麻美オルガン・リサイタル
		12:00	スウィートブライアー・ロッジ	歓迎ティー・パーティー
	ウォーターフォード	15:00	ガーター・レーン・アート・センター	小泉八雲・朗読の夕べ「稀人——彼方より訪れしもの」
10/12(月)	ゴールウェイ	18:30	キングス・ヘッド・パブ	山本恭司ライブ in ゴールウェイ
10/13(火)	コング	10:30	クロスロード・コミュニティ・センター	コング歓迎イベント
	ゴールウェイ	17:00	Galway 2020	ゴールウェイ歓迎レセプション
		18:30	ナイズ・アイランド・シアター	小泉八雲・朗読の夕べ「稀人——彼方より訪れしもの」

企画展

「帰郷——オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーン」

An Exhibition “Coming Home—The Open Mind of Patrick Lafcadio Hearn”



〔開催期間〕2015年10月7日—2016年1月3日

〔場所〕ダブリン・リトル・ミュージアム 企画展示室（ダブリン）

〔主催〕ダブリン・リトル・ミュージアム

〔共催〕在アイルランド日本国大使館、山陰日本アイルランド協会

〔協力・協賛〕アイルランド基金、ダブリン市、松江市、小泉八雲記念館、アイルランド日本協会、小泉家、タキス・エフスタシウ、八雲会、国際交流基金

〔展示企画〕サイモン・オコーナー、ジョン・モーラン

2012年からダブリンでの実施を模索してきたオープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーンプロジェクトは、ラフカディオ・ハーンの祖国アイルランドでついに開催されることになった。「帰郷——オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーン」と題したこの企画展は、会場になったダブリン・リトル・ミュージアムの学芸員サイモン・オコーナー氏とアイリッシュ・タイムズ紙の記者ジョン・モーラン氏、そして伝記作家のポール・マレイ氏を中心となって準備を進めてきた。アイルランドではいまだ無名に近い作家であるラフカディオ・ハーンの初めての大きな里帰り展として、話題をよぶ結果となった。

ハーンは幼少期をアイルランドで過ごしているが、両親の離婚や養母である大叔母の破産などにより、孤独で不幸な

幼少年時代を送ったため、長い間アイルランドでハーンが語られることはなかったが、没後111年を経てやっと彼の魂は祖国に帰ることができ、関係者は一堂に喜びを隠せない。

また、リトル・ミュージアムでは、期間中数回のレクチャーやワークショップを開催予定で、ハーンを通して日本の精神性や日本文化を学ぶきっかけを提供するとともに、今後の新たな活動展開が期待できる。

このプロジェクトは、2009年よりハーンのオープン・マインドをコンテンポラリー・アートで表現する美術展としてゆかりの都市で開催されてきた（主に松江市主催）。ダブリンでは、タイトルとコンセプトを共有してリトル・ミュージアム独自で企画したこと、松江にある小泉八雲記念館の所蔵品約15点を初めて海外で展示したこと、ハーンの著作（タキス・エフスタシウ氏所蔵）やハーンの写真（小泉家所蔵）展示など、きわめてダブリン市民の関心を引くユニークで魅力的な展示内容となった。

オープニングには招待客約80名が集い、ジミー・ディーニハン首相府兼移住者担当国務大臣はじめ渥美千尋駐アイルランド日本国大使、ひ孫の小泉凡氏らが来賓として訪れた。

共同通信の配信により、日本国内20社以上がこの記事を掲載した。



◆オープニング・セレモニー

[日時]10月7日(日) 18:00-19:45

[ゲスト]ジミー・ディーニハン(首相府兼移住者担当国務大臣)、渥美千尋(在アイルランド日本国大使)、

小泉凡(小泉八雲曾孫、島根県立大学教授)

[参加者]約80名(招待者のみ/日本、アイルランド、ギリシャ、アメリカ、イギリスほか)



◆レクチャーと音楽「ラフカディオ・アット・ホーム」

[日時] 10月8日 18:00-

[講師] ロジャー・ウィリアムソン(北九州市立大学教授)、ジョン・モーラン(アイリッシュ・タイムズ紙ジャーナリスト)、ポール・マレイ(ハー
ン伝記作家)、小泉凡(小泉八雲曾孫、島根県立大学教授)

[アイリッシュハーブ] 村上淳志

[司会] サイモン・オコーナー(ダブリン・リトル・ミュージアム学芸員)

[参加者] 約70名



[レクチャー]

- ・ ロジャー・ウィリアムソン 'Lafcadio Hearn: Open Minded Rebellion in Print'
- ・ ジョン・モーラン 'Under the Volcano in St. Pierre'
- ・ ポール・マレイ 'A Fantastic Journey: The Life & Literature of Lafcadio Hearn'
- ・ 小泉凡 'Considering Lafcadio Hearn's Open Mind from the Point of View of One Descendant'

◆ポール・マレイによる

「ラフカディオ・ハーンのダブリンの恐怖」

[日時] 10月14日 19:00-

[上演] ダブリン・シェイクスピア、アイルランド日本協会

[演出] ヴァレリー・グリーン

[参加者] 約50名



小泉八雲・朗読の夕べ

まろうど

「稀人——彼方より訪れしもの」

Lafcadio Hearn Reading Performance “稀人 Maraudo—Visitors from the World Beyond”



「小泉八雲・朗読の夕べ」は、ラフカディオ・ハーンにゆかりのあるダブリン、ウォーターフォード、ゴールウェイの三都市で開催された。脚本と朗読を俳優の佐野史郎が、音楽をギタリストの山本恭司が担当し、ハーンの曾孫である小泉凡がパフォーマンスに先立ってハーンについて講演をしたことにより、成度の高いパフォーマンスとなった。アイルランド公演のために書き下ろされた新作「稀人——^{まろうど}彼方より訪れしもの」は、あまり知られていないハーンの幼少年期のエピソードや、アイルランドに伝わる神話や妖精譚などに類似したハーンの世界を主に取り上げたことにより、観客は違和感なくハーンの世界に入り込むことができたのではないかと感じた。また愛憎が入り混じった父チャールズに対するハーンの複雑な心情を、「父への回帰」とした佐野の想いが見事に表現されたのではないだろうか。

いずれの会場も、観客は初めて見る新しいスタイルのパフォーマンスに魅了され、終了後はスタンディング・オベーションとなり、拍手は鳴りやまず涙を流す人も多くみられた。

いまだアイルランドでは無名のアイルランド人作家であるラフカディオ・ハーンが、故郷の人々に温かく迎え入れられたと

実感する瞬間となった。舞台後方のスクリーンに映し出される字幕と写真イメージなどの舞台演出が、パフォーマンスをより魅力的なものにしたのではないと思う。

この朗読パフォーマンスは、世界に向けてハーン文学とそこに込められたハーンの多様性やオープン・マインドな精神性を紹介するという大きな役割を担っており、神話や伝説、伝統音楽が「言葉」や「耳」によって後世に受け継がれてきた、口承文芸が色濃く残るアイルランドでの公演は、大変意義深いものであった。

特にアイルランド西部の町ゴールウェイでは、アイルランド伝統音楽の演奏と、地元ストーリーテラーによるストーリーテリングを前半のプログラムに組み入れ、ハーンがアイルランドから受けたであろう影響を、肌で感じていただくことができた。

それぞれの会場となった、セント・アンズ・チャーチ、ガーター・レーン・アート・センター、ナンズ・アイランド・シアターおよび現地の受入れ団体から積極的な協力と温かい歓迎を受け、それが成功につながったと感謝している。特にセント・アンズ・チャーチは、ハーンの玄祖父がこの教会で司祭を務めた経緯があり、不思議な因縁を感じる。ダブリンでは渥美千尋日本大使、ウォーターフォードではジョン・カミング市長による歓迎レセプション、

そしてゴールウェイではGalway 2020とWa Caféが歓迎のレセプションを開催し、副市長ナイル・マクネリス氏から歓迎のスピーチをいただいた。また、共催として在アイルランド日本国大使館と現地の関係者に協力を働きかけていただいた駐日アイルランド大使館に対して心からお礼申し上げる。

[原作]小泉八雲

[脚本・朗読]佐野史郎

[音楽]山本恭司

[監修]小泉凡

[字幕監修]ヘザー・ディクソン

[舞台監督]錦織伸行

[監督補佐・記録]西川徹

[プロデューサー]小泉祥子

[主催]山陰日本アイルランド協会

[共催]在アイルランド日本国大使館

[協力・後援]松江市、FEXCO、東横イン、KINKODO Ltd.、Galway 2020、Wa Café、セント・アンズ・チャーチ、ガーター・レーン・アート・センター、ナンズ・アイランド・シアター、駐日アイルランド大使館、Fáilte Ireland/Tourism Ireland、田面徹、高嶋敏展、山陰中央新報社

[助成]国際交流基金

[プログラム]

1. 弟への手紙(『アトランティック・マンズリー』1923年1月号)
2. ひまわり(『怪談』1904年)
3. 私の守護天使(エリザベス・ビスランド『ラフカディオ・ハーンの生涯と手紙』1906年)

4. むじな(『怪談』1904年)

5. ちんちん小袴(『日本のおとき話集』1903年)

6. 生神(『仏の畑の落ち穂』1897年)

7. ひまわり(『怪談』1904年)

◇ダブリン公演

[日時]10月9日(金) 13:30-

[場所]セント・アンズ・チャーチ(ダブリン)

[講演]小泉凡

[オルガン]米山麻美

[入場料]10ユーロ

[参加者]約150名

◇ウォーターフォード公演

[日時]10月11日(日) 15:00-

[場所]ガーター・レーン・アート・センター(ウォーターフォード)

[講演]小泉凡

[入場料]無料

[参加者]約150名

◇ゴールウェイ公演

[日時]10月13日(火) 18:30-

[場所]ナンズ・アイランド・シアター(ゴールウェイ)

[アイルランド音楽]アンダース&マヨ

[ストーリーテリング]ラブ・S.フルトン

[入場料]10ユーロ

[参加者]約90名







◇ゴールウェイ歓迎レセプション

[日時] 10月13日 17:00-

[場所] Galway 2020 (ゴールウェイ)

[主催] Galway 2020

[協力] Wa Café



小泉八雲庭園フレンドシップ・イベント

Friendship Events at The Lafcadio Hearn Gardens, Tramore



ウォーターフォード市長主催 歓迎レセプション

Welcome Reception invited by Waterford City
and County Council hosted by the Mayor of Waterford

〔日時〕10月9日 18:30-

〔場所〕ウォーターフォード市役所(ウォーターフォード)

〔参加者〕約60名

ウォーターフォード市と市議会は、オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーンの訪問団約30名を市役所に招き、レセプションを開催した。ジョン・カミンズ市長はじめ市の関係者、小泉八雲庭園のアグネス・エイルワード氏と関係者が集まり、訪問団を代表して内藤守がお礼を述べ、お茶とサンドウィッチでしばし和やかな時間を過ごした。

また小泉八雲から、庭園の作業を担当したCEスキームのメンバーに、感謝状が手渡された。

小泉八雲のレリーフ除幕式

Unveiling of a "Relief of Koizumi Yakumo"
presented by Matsue City

[日時]10月10日 11:00-

[場所]小泉八雲庭園(トラモア)

[参加者]約250名…ジョン・カミンズ(ウォーターフォード市長)、山田有一(在愛日本大使館文化担当)、アン・ハーバー(司会/トラモア・デベロップメント・トラスト代表)、アグネス・エイルワード(小泉八雲庭園代表)ほか

松江市は、6月のガーデンのオープンに伴い友好の印として小泉八雲のレリーフ(倉澤實作、2010年)を贈呈することを決め、トラモア側は、オープン・マインドの事業の一環として訪れた訪問団の来園に合わせて贈呈式を行った。カミンズ

市長は、6月の開園以来数千人の来園者があることを喜び、ラフカディオ・ハーンがアイルランドで新たに認識されるようになったと話した。また、松江市からのレリーフ贈呈に感謝し、今後の松江とウォーターフォード、トラモアの新しい友好を築いていきたいと述べた。

曾孫の小泉凡氏が挨拶をし、続いて団長の内藤守氏が松浦市長のメッセージを読み上げた。その後、カミンズ市長と小泉凡氏によってレリーフの除幕が行われた。このレリーフは、しばらくの間エキシビション会場に展示され、数年後に開館予定のビクターズセンター(庭園敷地内)に永久展示されることが決まっている。

参加者は、式典の後ガーデンのツアーに参加し、庭園のデザインを担当したマーティン・カレンズ氏の案内で、2.5エーカーの美しい庭園を楽しんだ。





トラモア歓迎イベント

Welcome Event at Tramore Coastguard Cultural Centre

[日時]10月10日(日) 15:00-

[場所]トラモア・コーストガード・カルチャー・センター(トラモア)

[参加者]約100名

◇小展覧会「ラフカディオ・ハーン——トラモアから松江へ」

[開催期間]10月10日(日)ー18日(日)

◇スピーチ「ヒストリカル・センターの設立、役割そして将来性」

[講師]マリア・ゲニツアリウ(ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター)

◇日本茶のレクチャー＆ワークショップ

[インストラクター]中村紗智子、中村万紀子、内藤守

[通訳]そのみ・レズリー

小泉八雲庭園のオープンを記念して小泉家所蔵の写真約25枚(アイルランドのハーン家の家族を含む)をトラモアに寄贈した。また、高嶋敏展氏による松江のハーンゆかりの地の写真12枚も合わせ、エキシビションでは、これらの写真を中心に、トラモアの風景など約50点とパネルを展示し、ハーンの生涯やトラモアとの関わりを紹介した。また、小泉八雲のちりめん本(タキス・エフスタシウ氏寄贈)などの書籍も展示され来館者を楽しませた。期間中には、地元の住民や小学生がハーンを学ぶために訪れた。

昨年レフカダにオープンしたラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センターのキュレーター、マリア・ゲニツアリウ氏によるスピーチがあり、ヒストリカル・センターの成り立ちやその後の活動、そして将来の計画などが語られた。トラモアの庭園と同じように、ハーンを文化的な資源として町の活性化のために活用している事例として、聴講者の共感を呼んだ。

さらにそれを受けて、オープン・マインド・プロジェクトの代表小泉祥子が、未来に向けてレフカダ、トラモアそして松江



がハーン顕彰のハブシティとして互いに情報を共有し合い、新しい形で交流を深めていくことを提案した。

マリア・ゲニツアリウ氏からは、彼女自身によるアート作品「猫を書いた少年」がトラモアに寄贈された。将来におけるトラモア、レフカダ、そして松江の交流の懸け橋になるようにとの思いが作品に込められている。

また、タキス・エフスタシウ氏からは、初版本を含む小泉八雲の著書数冊とちりめん本・*The Japanese Fairy Tales* など約15点が寄贈された。松江で活躍する写真家・高嶋敏展氏による「神々の国の首都」の写真12点が、小泉家からは八雲の家族の写真など約20点が寄贈され、会場に展示された。

以上の寄贈品は、数年後に小泉八雲庭園内にオープン予定のビジターズセンターに展示される予定である。

中村紗智子氏と中村万紀子氏、そして内藤守氏がインストラクターとなって、抹茶の立て方のワークショップを行ったところ、多くの参加があった。参加者は、みな初めてたてるお茶に緊張した様子だったが、和やかな雰囲気の中で楽しくお茶会を進めることができた。日本のシンボル「桜」とアイルランドのシンボル「シャムロック」をあしらったお菓子が好評だった。準備を引き受けていただいた主催者に感謝する。

米山麻美オルガン・リサイタル

Mami Yoneyama Organ Rital

[日時] 10月11日 11:15-12:00

[場所] ホーリー・クロス・チャーチ

[出演] 米山麻美(松江市総合文化センタープラバホール専属オルガニスト)

[参加者] 約150名

松江を拠点に活躍するオルガニスト米山麻美氏によるハーンに捧げるコンサートを、教会と関係者による協力の元で開催した。会場となったホーリー・クロス・チャーチは、ハーンの養母で大叔母であるサラ・ブレナンが眠る場所でもあり、こ

こでも不思議な因縁を感じる。

ハーンとトラモアそして日本をイメージする曲は、聴く人の心を揺さぶり涙する人もあった。アイルランド、日本、ギリシャ、アメリカなど国境を越えて聴く人の心に響く、ハーンが繋ぐ友好の響きであった。コンサート実現のためポーラ・ゴードンさんはじめ聖歌隊のメンバーの協力を得た。

コンサート終了後、一行はハーンが幼い頃サラ・ブレナンに連れられて滞在し、サラが晩年を過ごして亡くなったというスイートブライアー・ロッジと呼ばれる家に招かれた。家を所有するアフラ・クロニンさんは、ハーンが過ごした当時の様子を語り、また訪問客のためにランチを準備してもなして下さった。思いがけない歓待に、驚きとともに喜びを隠せなかった。



トラモアでの一連の行事は、小泉八雲庭園の代表アグネス・エイルワード氏を中心として見事にオーガナイズされた素晴らしい友好事業となった。子どもたちが日本国旗を持って訪問団を出迎えたり、パブやレストランの窓に旗を貼ったりして町ぐるみで歓迎するなど、アイリッシュ・ホスピタリティに溢れる3日間となった。トラモアは小泉八雲庭園のオープンにより町に活気が満ち、観光や学び、住民の憩いの場として有効活用され始めた。今後のさらなる活動が大いに期待できる素晴らしい取り組みに敬意を表すると同時に、今後の松江やレフカダとの交流にも期待したい。

[主催] 小泉八雲庭園

[共催] 在アイルランド日本国大使館、山陰日本アイルランド協会

[協力・後援] トラモア・デベロップメント・トラスト、ウォーターフォード市、松江市、駐日アイルランド大使館、ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター、風流堂、中村茶舗、小泉家、タキス・エフスタシウ

レクチャー「ハーンと日本」と日本茶の体験

Lectures “Hearn and Japan” & Japanese Tea Ceremony at Dublin City University



[日時]10月8日(金) 14:00-17:00

[場所]ダブリンシティ大学(ダブリン)

[主催]ダブリンシティ大学

[共催]山陰日本アイルランド協会

◇レクチャー「ハーンと日本」

[講師]小谷瑛輔(富山大学准教授)、結城史郎(富山大学准教授)、真鍋晶子(滋賀大学教授)、ロジャー・ウィリアムソン(北九州市立大学教授)

[コーディネーター]笹本涼子(ダブリンシティ大学講師)

[参加者]約100名

ダブリンシティ大学(DCU)応用言語異文化学部の笹本涼子氏が中心となり、オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーンのイベントに合わせ、学生やファカルティを対象とした小泉八雲に関する講義を設定していただき、日本語のクラスの学生と地元の高校生、日本からの訪問団ら約100人が参加した。これは、今まで無名であったアイルランド人作家ラフカディオ・ハーンと日本に対する興味の高さを表している。

笹本氏の進行で、まずDCUのウェルカムスピーチがあり、その後ラフカディオ・ハーンの曾孫で島根県立大学教授の小泉八雲氏がハーンについて簡単なイントロダクションを行った。そのあと「ハーンと日本」というテーマで、小谷瑛輔氏、結城史郎氏、真鍋晶子氏、ロジャー・ウィリアムソン氏の順に4人のスピーカーが発表し、質疑応答が行われた。

後日いただいた感想によれば、日頃はマンガやアニメで現代日本文化に触れることの多い学生も、小泉八雲というアイルランド人作家の存在を知るだけでなく、その文学作品に触れることができ、有意義な時間を過ごすことができた。今後の授業に生かしていきたいということであった。

[レクチャー]

- ・小谷瑛輔「小泉八雲と芥川龍之介」
- ・結城史郎「ラフカディオ・ハーンが日本の文化に与えた影響——「雪女」をめぐる」
- ・真鍋晶子「ハーン、フェノロサ、イエイツ——東西を映す三面鏡」
- ・ロジャー・ウィリアムソン「ラフカディオ・ハーンの憧憬と帰属」



◇日本茶のレクチャー＆ワークショップ

[インストラクター]中村紗智子、中村万紀子、内藤守

[参加者]約50名

日本茶のワークショップは、中村紗智子氏と万紀子氏による簡単なお点前とお茶の話のあと、参加者が実際に抹茶を点ててみるという体験型の形式で行った。松江の老舗和菓

子店の内藤守氏からアイルランドのために桜とシャムロックの干菓子を提供していただき、日愛の友好を楽しむことができた。

参加者は高校生や大学生など合わせて50人ほどで、初めて体験する日本の茶の湯の文化に緊張した面持ちで参加していたが、とても良い経験になったと話していた。大学生のボランティアと日本大使館関係者により、準備と運営はスムーズに行われた。



コング歓迎イベント

Welcome Event in Cong

[日時]10月13日 10:30-

[場所]クロスロード・コミュニティー・センター(コング)

[参加者]日本からの訪問団約25名、地元の関係者約70名

ハーンは幼い頃、何度か大叔母のサラ・ブレナンに連れられてメイヨー州のコングという村に滞在している。そこには父チャールズの姉のキャサリン・エルウッドがストランドヒルハウスと呼ばれる屋敷に住んでいた。ハーンは晩年に出版した*KWAIDAN*という著作の中で、伯母キャサリンの息子で従兄のロバートと「妖精の輪」を探して遊んでいたところ、竖琴弾きがやってきたという回想を綴っている。

そのコングでは、やはりラフカディオ・ハーンは全くといっていいほど無名であるが、Jim McGovern氏が中心となって、訪問団を歓迎するイベントを開催した。一行は、まずハーン

が訪れたストランドヒルの跡地を訪れ、その風光明媚な景色を楽しんだ後、コミュニティー・センターに案内された。ここではまず地元のセント・ジョセフ・ナショナル・スクールの子どもたちによる「コングの歴史」という劇で迎えられた。また子どもたちが調べた「JAPAN」についてのパネル展示も紹介された。その後、和服姿のハーンの写真の除幕があり、手作りのお菓子と紅茶で地元の人々としばし語らい、最後にガーデンに訪問を記念して植樹が行われた。この心のこもった歓迎に感嘆した一行は、御礼に日本の歌「ふるさと」を歌い、コングの人々にお礼を言って別れた。コングでは、今後このコミュニティー・センターを中心にハーンの展示コーナーを作る予定で、コングの人びとはゆかりあるアイルランド人作家ラフカディオ・ハーンを温かく迎え入れてくれるだろう。





マイケル・D.ヒギンズ大統領との謁見

Presentation at the residence (Aras an Uachtarain)
to the President of Ireland Michael D. Higgins



[日時]10月7日(金) 14:30-

[場所]大統領公邸(ダブリン)

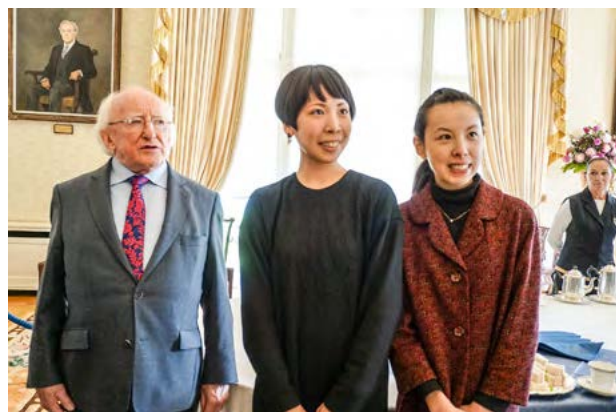
[参加者]訪問団代表17名(通訳1名を含む)

内藤守訪問団団長、小泉凡氏(小泉八雲曾孫)をはじめとするメンバー16名と通訳1名は、7日の午後、マイケル・D. ヒギンズ・アイルランド大統領と謁見するという栄誉を与えられた。これはアン・バリントン駐日アイルランド大使の計らいで実現したものであり、訪問団約30名の内特に現地で役割を担うものが中心に訪問を果たした。

ヒギンズ大統領は、国民に大変愛される人柄であり人気

も高い。特に文化に対して造詣が深く、ラフカディオ・ハーンについて深い知識があり、我々の訪問を心から歓迎していただいた。また、大統領自身がロックファンであるという話題から、ハーン作品の朗読パフォーマンスを行う佐野史郎さん・山本恭司さんとは意気投合し、話が弾んだ。

一行は、ひとりずつ大統領と短い会話を交わした後、日本の国花桜とアイルランドの国花シャムロックをイメージした和菓子や KWAIDAN の本などの贈呈をした後、記念写真を撮り、ひと時の間アイリッシュ・アフタヌーンティーをいただきながら、大統領との歓談を楽しんだ。



渥美千尋在アイルランド日本国大使主催 レセプション

Reception Hosted by the Japanese Ambassador Chihiro Atsumi



[日時] 10月7日(金) 20:00-

[場所] 在アイルランド日本国大使公邸(ダブリン)

[参加者] 約80名

リトル・ミュージアムのオープニングに参加後、午後8:00から日本からの訪問団を含むイベントの関係者が渥美千尋日本国大使公邸に招かれ、約80人がアイルランド国内外から一堂に会した。渥美大使は、一連のイベントがラフカディオ・ハーンを知るよい機会になるとともに、アイルランド国民がハーンと日本文化に深い興味を示してくれることを期待し、また日

本とアイルランドの絆が深まることを願っているとあいさつされた。その後参加者は互いに交流を深め、これから始まる一連のイベントの成功を誓い合った。

日本大使館には、「オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーン——帰郷」の共催者として、広報はじめ様々な面で心強い協力をいただいた。特に文化担当の山田有一氏には、当初からプロジェクトに関わっていただき、パンフレットの配布やすべてのイベントに参加していただくなど積極的に支えていただいた。日本大使館の協力に心から感謝申し上げます。

ラフカディオ・ハーンゆかりの地ツアー

Lafcadio Hearn Tour in Dublin



〔日時〕10月9日 9:30-

〔場所〕ダブリン市内

〔ガイド〕ポール・マレイ（ハーン伝記作家）

〔参加者〕約30名

ツアーの一行は、ダブリンでハーンが滞在した家を訪ねるタウンツアーに参加した。案内人は、ハーンの伝記作家であるポール・マレイ氏で、参加者は約150年前のラフカディオ少年に想いを馳せた。一行が訪ねたのは以下の家で、マレイ氏はエピソードを交えながら説明をした。

1. ローワー・ガーディナー・ストリート48番地
2. ラスマインズ・レンスター・スクエア21番地
3. ラスマインズ・アーサーテラス3番地
4. アッパー・リーゾン・ストリート73番地

ローワー・ガーディナー・ストリートの家は、現在 Townhouse というB&Bになっており、1階には写真を展示したちょっとしたギャラリーがある。2歳の時ダブリンに到着したハーンは、まずこの家で暮らした。その後移ったラスマインズ・レンスター・スクエアの家では、偶然自宅にいた現在の住人が中を開放して訪問団を招き入れ、家の中を案内していただいたことに、参加者は感激した。

山本恭司ライブ in ゴールウェイ

Kyoji Yamamoto Live in Galway

[日時] 10月12日(日) 20:00-

[場所] キングス・ヘッド・パブ(ゴールウェイ)

[主催・協力] キングス・ヘッド・パブ

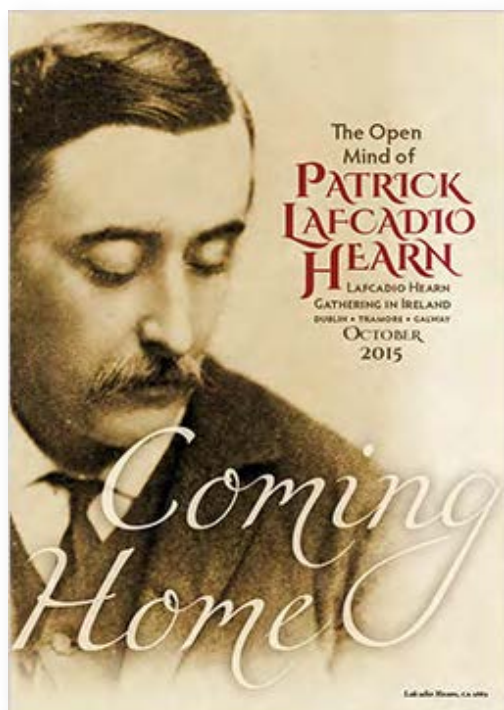
世界で活躍するギタリストの山本恭司氏は、音楽が盛んなオープン・マインド・シティであるゴールウェイで、最も歴史ある建物を持つキングス・ヘッド・パブにおいて、ソロライブを行った。同氏は、1975年からハードロックバンドBOWWOWの

リーダーとして活躍し日本のロックシーンをリードしてきた。1884年には、VOWWOWを結成してロンドンを中心に4年間の海外活動を展開してきたこともあり、いまだにヨーロッパでは名前が知られている。

今回は、朗読のタペ公演の合間を縫って、アイルランド初のソロライブの機会を与えられ、ゴールウェイの人々を魅了した。地元バンドとのセッションもあり、音楽を通して日愛の交流を深めることができた。



広告デザイン Advertisement Design



総合パンフレット



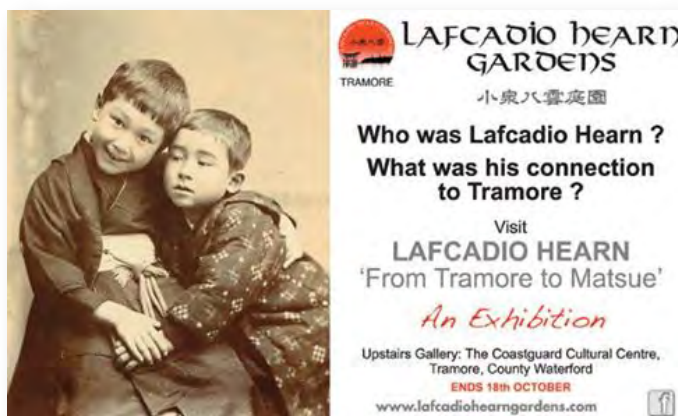
企画展「帰郷——オープン・マインド・オブ・パトリック・ラフカディオ・ハーン」
(ダブリン・リトル・ミュージアム)



ポール・マレイによる「ラフカディオ・ハーンのダブリンの恐怖」
(ダブリン・リトル・ミュージアム)



小泉八雲・朗読の夕べ「稀人——彼方より訪れしもの」



小展覧会「ラフカディオ・ハーン——トラモアから松江へ」
(トラモア・コーストガード・カルチャー・センター)



山本恭司ライブ in ゴールウェイ(キングス・ヘッド・パブ)

掲載新聞記事 Articles

日本

『日本経済新聞』『西日本新聞』『東京新聞』『静岡新聞』
『信濃毎日新聞』『山陰中央新報』ほか20紙以上

『山陰中央新報』寄稿:川島典子(松江総合医療専門学校非常
勤講師)「小泉八雲を育んだ国・アイルランド訪問記」(10回連載)

アイルランド

The Irish Times (National)
Manster Express (Waterford)
Advertiser (Galway) ほか

[主催]

ダブリン・リトル・ミュージアム
山陰日本アイルランド協会
小泉八雲庭園
ダブリンシティ大学 ほか(事業別)

[共催]

在アイルランド日本国大使館
松江市
ウォーターフォード市
Galway 2020 ほか

[後援]

駐日アイルランド大使館 ほか

[助成]

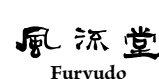
国際交流基金(企画展「帰郷——オープン・マインド・オブ・パトリック・
ラフカディオ・ハーン」、小泉八雲・朗読のタペ)

SPECIAL THANKS:

Agnes Aylward	Jim McGovern
Páraic Breathnach	Minako Miyabe
Vinny Browne	John Moran
Mieko Conwey	Paul Murray
Afra Cronin	Oisín O'Conlain
Takis Efstathiou	Simon O'Connor
Motoko Fujita	Patricia Philbin
Rab Fulton	Ryoko Sasamoto
Paul and Mary Grealish	Caroline Senior
Tracy Geraghty	Anders Trabjerg & Mayo
Paula Gordon	Yanachiy
Anne Harper	Yuichi Yamada
Yoshimi Hayakawa	Naoko Yamashita
Yuko Kimura	Dublin City University
Sonomi Leislíe	Glór na Mara Primary School
Charles Marshall	St. Josephs National School



Takis Efstathiou





The Open
Mind of
**PATRICK
LAFCADIO
HEARN**
Coming Home
LAFCADIO HEARN
GATHERING
IN IRELAND
OCTOBER
2015

hearn2015.sanin-japan-ireland.org
www.facebook.com/hearn2014